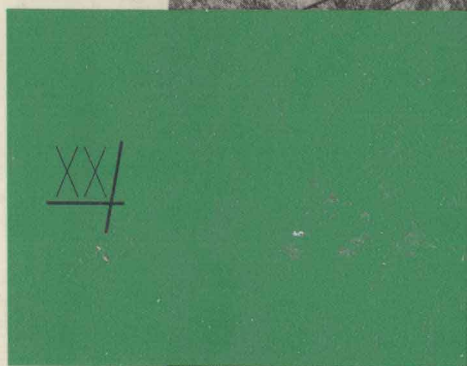


20世紀思想家文庫 12

宮沢賢治

存在の
祭りの中へ

見田宗介著



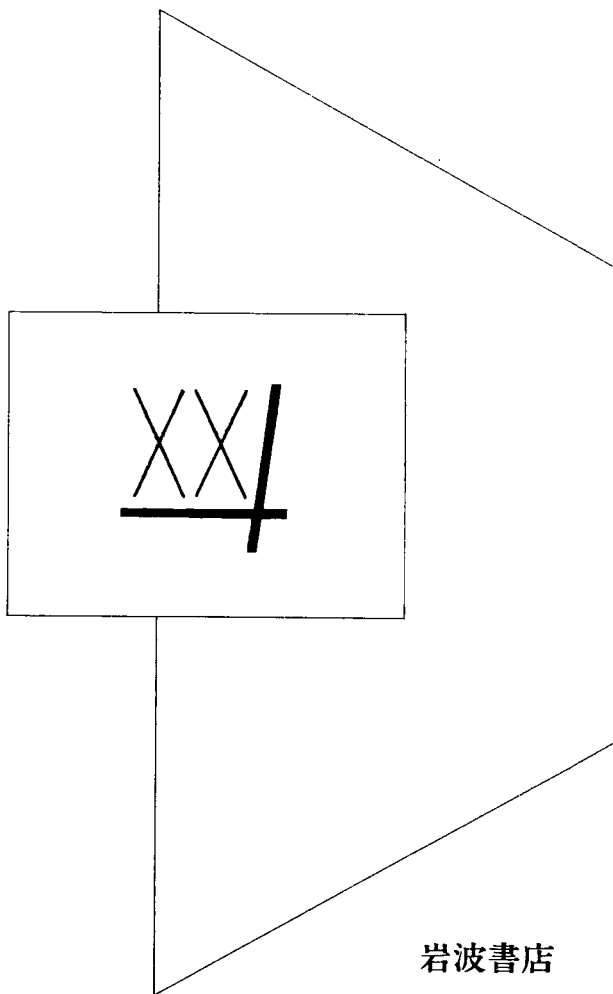
岩波書店

20世紀思想家文庫
12

宮沢賢治

— 存在の
祭りの中へ —

見田宗介著



岩波書店

宮沢賢治

20 世紀思想家文庫 12

1984 年 2 月 29 日 第 1 刷発行 ©

1984 年 3 月 21 日 第 2 刷発行

定価 1500 円

著 者 見 田 宗 介

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

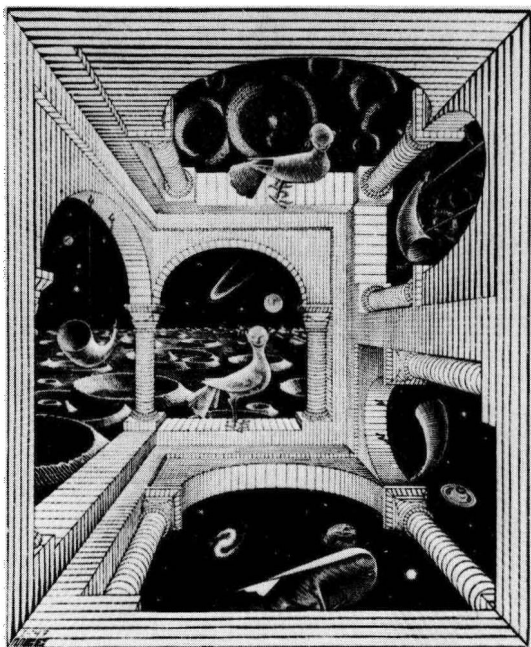
目次

序章	銀河と鉄道	1
一	りんごの中を走る汽車	3
二	標本と模型	13
三	銀河の鉄道	35
四	『銀河鉄道の夜』の構造	47
第一章	自我という罪	59
一	黒い男と黒い雲	61
二	目の赤い鷺	72
三	家の業	86
四	修羅	103
第二章	焼身幻想	123
一	ZYPRESSEN つぎぬけるもの	125
二	よだかの星とさそりの火	132
三	マジェラン星雲	146

四	梢の鳴る場所……………自己犠牲の彼方	154
第三章	存在の祭りの中へ……………	163
一	修羅と春……………存在という新鮮な奇蹟	165
二	向うの祭り……………自我の口笛	171
三	へんげんのこわれるとき……………ナワールとトナール	184
四	銀河という自己……………いちめんの生	203
第四章	舞い下りる翼……………	207
一	法華経・国柱会・農学校・地人協会……詩のかなたの詩へ	209
二	百万疋のねずみたち……………生活の鱧／生活の罨	224
三	十一月三日の手帳……………装備目録	238
四	マグノリアの谷……………現在が永遠である	249
注	……………	254
年 譜	……………	268
あとがき	……………	274

序章

銀河と鉄道



M. C. Escher 「もう一つの世界」 1947

一 りんごの中を走る汽車

——反転について——

こんなやみよのはらのなかをゆくときは
客車のまどはみんな水族館の窓になる

(乾いたでんしんばしらの列が

せはしく遷つてゐるらしい

きしやは銀河系の玲瓏レンズ

巨きな水素のりんごのなかをかけてゐる)

りんごのなかをはしつてゐる

けれどもここはいつたいどの停車場だ

枕木を焼いてこさえた柵が立ち

(八月のよるのしづまの寒天凝膠)⁽¹⁾

『青森挽歌』という二五二行の長詩の、走り出しの数行である。

ここで詩人ののっている汽車は、鋭利なフォークの先端のようにいきなりりんごの果肉の中を走る。へきしやは銀河系の玲瓏レンズ／巨きな水素のりんごのなかをかけてゐる／りんごのなかをはしつゝゐる。

宮沢賢治の書くものの中には、〈汽車の中でりんごをたべる人〉というイメージが、くりかえし印象深くたちあらわれてくる。『銀河鉄道の夜』の中でも、〈鍵をもった人〉である天上の燈台守が、いつのまにか黄金と紅の大きなりんごをもっていたりする。りんごは「鍵」の変身でもあるかのように。そしてこの銀河鉄道のおわりのところで、少年ジョバンニに世界の真理を開示してみせる〈黒い大きな帽子の男〉は、「おまえがあうどんなひとでもみんな何んもおまえといっしょに苹果をたべたり汽車に乗ったりしたのだ」⁽²⁾という。ポーセを探すチュンセのために書かれた手紙でも、〈蒼冷と純黒〉⁽³⁾というふしぎな対話の断片でも、あるいは『氷と後光』という短篇でもそうだけれども、人間が生のひとつきを分かちあいながら、あるいは孤独を噛みながらたしかに生きたということを刻印するあかしのように、汽車に乗る人たちは、いつもりんごをたべている。あるいはりんごを手にもっていたり、ポケ

ットにしまっていたりする。

りんごというものの形態のいちばん大きな、だれにでもすぐに目につく特質は、それがへ丸いものゝであるということ、けれども同時に、ゴムマリのようにとりつくしまもなく閉じた球体ではなくて、孔のある球体であるということ、それもボーリングのボールのように、表皮のどこかに外部からうがたれた孔^{あな}ではなくて、それ自身の深奥の内部に向って一気に誘いこむような、本質的な孔をもつ球体であるということである。それは人間の禁断の知恵の源泉についてのよく知られている神話の中で、〈鍵〉の象徴としてえらばれているように、存在の芯^{しん}の秘密のありかに向って直進してゆく罪深い想像力を誘発しながら、そのことによって、とじられた球体の「裏」と「表」の、つまり内部と外部との反転することの可能な、四次元世界の模^も型のようなものとして手の中にある。

* いうまでもなく、賢治が意識してりんごの形態論的なシンボリズムを用いたということではない。賢治はこのことに無意識に書いたと思う。そしてまさしく無意識のシンボリズムが問題なのだ。たとえ意識されたものであっても、それが真正のシンボリズムであるかぎり、それは必ず、意識の彼方から来るものの、意識にうつされたかたちにはかならないはずである。

** 空間の外部が内部にりんごのように吸いこまれてゆく反転^{はんてん}というイメージは、賢治がつよい関心をもっていた生物の発生学では、なじみの深い形象である。周知のように、わたしたちの身

体の最深部にある脊髄内部の中樞神経は、元来は胚の表面をおおっていた外胚葉の「陥入」によるものである。わたしたちのからだはいわば、内側に向っていったんうらがえされている。

そしていまこの長大な挽歌のはじまるところでは、詩人の乗っている汽車は反対にりんごの中を走る。「汽車の中のりんご」という心象は、へりんごの中の汽車」という心象へとうらがえされる。内にあるものが外にあるものに。外にあるものが内にあるものに。

青森であるから窓外にりんごの林があつて、賢治の鋭敏な嗅覚にりんごのおいを送つてよこし、それが作品のイメージを誘つたのかもしれないけれども、それは詩の外の世界であつて、天沢退二郎のいうように作品の中の列車は、もちろんりんごの果肉の中を走るのである。

そしてこのように、わたしたちが外部に見ているものの内部にいきなり存在している、という変換の自在さは、——このようなことをうけいれる空間感覚とともに、——じつはこの詩の冒頭の二行のうちに周到に用意されている。

こんなやみよののはらのなかをゆくときは

客車のまどはみんな水族館の窓になる

このとき詩人は、自分の乗っている汽車をその外からみている。おそらく黒くひろがった野原のはてからみているのである。わたしたちは、内部にありながら同時に外部にあるという二重化された眼の位置を、何の不自然さもないように詩人と共有してしまっている。

「銀河鉄道」の旅のおわりでは、〈そらの孔^{あな}〉である石炭袋がでてくる。

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ。」カムパネルラが少しそっちを避けるやうにしながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそっちを見てまるでぎくっとしてしまひました。天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどほんとあいてゐるのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えな⁽⁷⁾く眼がしんしんと痛むのでした。

石炭袋は、この宇宙の中のひとつの点でありながら、同時にこの宇宙の外にひろがり、この宇宙自体をもまたその中のひとつの点としてうかべているのかもしれないやうな、〈外部の空間への通路でもあり、露頭でもある。このようにして石炭袋は、宇宙空間の外部に向

つて反転されたり、りんごの孔である。りんごといううらがえし可能な空間が、銀河といううらがえし可能な空間の中で、それ自体うらがえされたかたちに他ならない。それは宇宙がそれ自体、異の空間への出口をもつ空間でなければならぬことを、詩人が直感しているからである。

この〈銀河鉄道〉の中で、車掌が検札にまわってきたとき、ジョバンニはじぶんが切符をもっていることをしらない。あわてて上着のポケットをみると、四つにたたんだはがきぐらいの大きさの緑いろの紙がでてくる。車掌はそれを見て、「これは三次空間の方からお持ちになったのですか。」という。天上の住人である鳥捕りのひとはこの切符をみて、それがどこにでも行ける切符であるという。「こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんかどこまででも行ける」通行券であることをおしえてくれる。ジョバンニがその切符をみると、「それはいちめん黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見てゐると何だかその中へ吸ひ込まれてしまふやうな気がする」のである。⁽⁸⁾

ジョバンニの切符がもうひとつの石炭袋、〈宇宙の出口〉であることはあきらかであるが、それは切符がへどこにでも行くことのできる通行券であり、つまり時・空をこえるもの、人間の運命からの解放のメディアに他ならないからである。

こんなやみよののはらのなかをゆくときは

客車のまどはみんな水族館の窓になる⁽⁹⁾

『青森挽歌』の詩人は汽車の中にいて、たちまち汽車の外にいます。『銀河鉄道の夜』のはじまりのところでは、はんたいに少年ジョバンニは汽車の外にいて、たちまち汽車の中にいます。

ジョバンニが丘をかけのぼり、町のはずれからへ遠く黒くひろがった野原をへ見たすと、そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんさんの旅人が、苹果^{りんご}を剥^むいたり、わらったり、いろいろな風にしてゐると考へますと、ジョバンニは、もう何とも云へずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

あゝあの白いそらの帯がみんな星だといふぞ。⁽¹⁰⁾

すると、どこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションといったかと思うといきなり眼の前が明るくなって、

気がついてみると、さっきから、ごとごとごとと、ジョバンニの乗ってゐる小さな列車が走りつづけてゐたのでした。ほんたうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座ってゐたのです。⁽¹⁾

へ外にありながら内にあること、この反転が、『青森挽歌』の最初の二行と正確に対応しながら逆であることはいうまでもない。

視界のかたに、一筋遠く光るもの、けれども同時に、へいつのまにかわたし、自分がその中にいるもの、このようなへ汽車のかたちは、正確にまたへ銀河のかたちでもある。ジョバンニがあの一列赤い灯のへ中にいる、自分をしるとき、またジョバンニは、あの白い天空の帯の内部にもいる自分を見出す。汽車は銀河の鉄道を走っているのだ。

このような銀河の構造を、賢治はこの作品の中ではっきりと意識して描いている。ジョバンニが丘をかけのぼった日の午後の授業で、ジョバンニは銀河の模型をみている。

「この模型をごらん下さい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちゃうどころななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じやうにじぶんで光ってゐる星だと考へます。私どもの太陽がこのほゞ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まはすとしてごらん下さい。こっちの方はレンズが薄いのでわづかの光る粒^{すなわ}即ち星しか見えないのでせう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるといふこれがつまり今日の銀河の説明なのです。⁽¹²⁾」

わたしたちはこの先生の説明の中で、いつのまにかこの凸レンズの中に入って、内側から光る砂粒たちをみている微細なものの目を獲得している。けれどもこのときにまたわたしたちは、わたしたち自身をつつむ広大な銀河系宇宙の全体を、その外側からみている巨大なもの、の目をも同時に獲得している。